

No.215

令和4年3月25日  
鹿児島県立甲南高等学校  
鹿児島市上之園町23番地1  
TEL (099) 254-0175  
題字 永野弘行 (本校教諭)

# 甲南だより

## 「心が動かされる瞬間」

教頭 松崎 浩隆



3年生の教室に入ると感じる、凜とした空気感。授業が始まる前の黒板の綺麗さ。教師が黒板に字を書くのも憚られるほどに毎時間綺麗に消され、次の授業の準備がなされている。どのクラスに行っても、同じ環境が作られているから、教師も自然と身が引き締まる。もちろん、授業が始まると、先生の一言一句を逃すまいと、生徒諸君の真剣な眼差しが教師に集中する。その眼力の強さに迫力を感じずにはいられない。教師も、甲南にふさわしい授業をしようと、自然に努めるのである。生徒と教師の真剣勝負の場が授業であり、その空気を特に感じられるのが3年生の教室なのだ。

気がつかされ、時間がないと尻に火がつく生徒も数多く現れる。教師も、その限られた時間の中で、できるだけ多くのことを教えたいと力も入る。ほどよい緊張感が教師の授業力をも向上させてくれる。その相乗効果もあるのだろう。教師の心が動かされる瞬間である。3年生で勉強に本腰を入れているのではなく、できるだけ早くスタートすることに気付けてほしい、頑張るのは今なんだよ、伸び盛りの途中で大学入試に突入してしまふ生徒が多いと、昨年の進路だよりで甲南生の弱点を指摘された先生もおられた。再度、このことを生徒諸君に問題提起しておきたい。

文武両道を掲げる学校は数多く存在する。本校もその一つである。生徒の中には、文も武もどちらも一流を目指そうとしているものも多い。全国を見渡しても然り。私もそんな生徒に数多く出会ってきた。長くバスケット部の顧問として生徒と関わりを持たせていた中で、スタートメンバーではなかったものの、には欠かせない存在だった彼は、1点を争う攻防の中で、オフィシャル席の椅子に座って戦況を見つめながら待つ、極度の緊張感を何度も何度も経験していた。当時のチームは50年ぶりの県ベスト4進出こそならなかったものの、その座を脅かす存在として、南日本新聞で取り上げられた試合もあった。その緊張感に比べれば、センター試験のプレッシャーなんて何でもなかったと、合格体験談の中で語った。そんな彼は、文武両道を見事にこなしてきた生徒の一人で、鹿児島大学歯学部にて現役合格した。進学校に限られた部活動時間の中でも自分に与えられた役割をコート上でどう表現すべきか自分の強みを考え、常に全力で真剣勝負を体現してきた。大会があるうと課題提出に言い訳することなく、コツコツ積み上げる努力が出来、各教科担からも一目置かれる存在で、多くの教師の心を動かした生徒の一人であった。人の心や感情を動かす瞬間を、自分が創り出す側になつてみてはどうだろうか。自分の姿や行動で人の感情や心を動かし、誰かの一歩を創れる人というのは本当にかっこいい。高次元の決断を期待したい。

## SSH活動報告

「リケジョに学ぶ 最新の科学」  
SSHでは、生徒の科学に対する興味・関心を高め、理工系分野への進路選択の幅を広げるために、第一線で活躍する女性を企業から招聘し、毎回異なる分野の講義を開催しています。



第一回は、医薬品開発を担う新日本科学から、安全性研究所分析研究部の白石綾氏をお招きし、講義と実験を行いました。実験では、スピルリナに含まれる色素成分を吸着クローマトグラフィーで分離しました。ペット内で色素がきれいに分離する様子に生徒たちは感動していました。白石氏の「得意なことと好きなことは同じではない。自分の可能性を狭めることなく、どんなことにも挑戦してみることが大切」というメッセージは、参加した1年生、2年生ともに印象に残ったようでした。

ス設計室の前田歩美氏をお招きしました。最新版のレクサスISの動画や実際の設計図やメーターなどに、生徒たちは大変驚いていました。また、フルオプシヨンの音響を備えたアルファードに試乗し、流れる音楽の響き方の違いを体感しました。前田氏からは「文系・理系にかかわらず、様々な感性やあらゆる視点を持つために、どんなことにも挑戦する大切さ、失敗経験を活かし、後の工程でよりよいものを作る事ができる」というお話をいただきました。

特に自動車に興味がある生徒は、設計の方法や学部などについても多かったですね。実際に試乗をさせていただきました。実際に試乗することで、生徒たちの興味がいよいよ深まったようです。文系、理系問わず、日頃の学習を新しい視点から捉え直したり、視野を広げたりする大変貴重な機会になりました。

